

コミュニティスポーツとコミュニティ活動に関する研究(2)

—農村の公民館レベルを中心にして—

堺 賢 治

(保健体育研究室)

(昭和59年10月11日受理)

目 次

- I. 緒言
- II. 方法
- III. 結果と考察
 - 1. コミュニティ活動の実態
 - 2. コミュニティ関与とコミュニティ形成
- IV. 結語

I. 緒 言

戦後の日本経済の高度成長は、社会構造の変化などによる様々な問題を生み出した。特に、農村社会に及ぼした影響は大きなものがあり、農家経済の崩壊、農民の労働者化が進んだ。また、これに伴う人口の急激な都市への流出及び農村の都市化現象は、生活共同体としての家を解体させ、さらには、それを取りまく地域共同体をも喪失させようとしている。

このような状況の中で、最近とみにコミュニティに対する関心が高まり、各地でコミュニティを中心とした、趣味・学習、スポーツ、奉仕など各種の活動が実施されている。そしてこれらのコミュニティ活動を通して、失われつつある地域共同体の連帯感を取り戻し、コミュニティづくりを推進していこうとする方向がみられる。コミュニティ活動の中でもスポーツ活動は年々盛んになっている。また、コミュニティにおけるスポーツ活動に参加している者ほど、コミュニティ活動によく参加している傾向が見られ、⁽¹⁾コミュニティ活動において、スポーツ活動の果たす役割は大きいといえる。加えて、農村においては公民館がコミュニティ活動を推進する拠点となっており、公民館活動ぬきではコミュニティ活動が語れないともいえる。

過去の研究をみても、スポーツ活動とコミュニティ活動（例えば、趣味・学習、スポーツ、奉仕活動など）の関連を、コミュニティ活動の基盤である公民館に焦点をあてて研究したものは少ない。⁽²⁾

そこで、本研究は農村におけるコミュニティスポーツによるコミュニティ形成の手がかりを得るため、第一に、農村の公民館レベルのコミュニティ活動の実態を把握するとともに、第二に、住民はどのような順序でコミュニティ活動へ関与しているかを、男性と女性に分けて、明確にすることを目的とした。

II. 方 法

調査対象：愛媛県東宇和郡城川町^(註1)の中から成人の男女1,416名を選んだ。

調査時期：昭和57年10月

調査方法：質問紙による配票調査

回収率：有効標本回収数771, 有効回収率55.4%

本論では、都市との比較もかねて、30歳代、40歳代の男女334名(男性—167名, 女性—167名)を選んだ。

(注1) 城川町は愛媛県の西南部に位置し、県都松山市より南の約80kmの地点にあり、標高700mから1,100mという急峻な四国山地の山々に囲まれた面積126.72km²の小さな村である。人口は、昭和25年の12,210人をピークに、昭和40年には9,047人, 昭和45年には7,489人, 昭和50年には6,715人, 昭和55年には6,212人と過疎化が進んでいる。また産業別人口比については、昭和55年現在、第一次産業が57.8%を占め、第二次産業が18.6%, 第三次産業が23.6%であり、農業中心であるといえる。

III. 結果と考察

1. コミュニティ活動の実態

(1) コミュニティ活動の種類

コミュニティ活動を分類するとさまざまな種類があり、本論では、新堀通也氏の社会教育の学習内容の分類^(註2)を参考にした。

これによると、Y軸に個人志向—社会志向^(註2)をとり、X軸に実学—虚学をとって分類すると、学習の内容や活動に四つの型(実利型, 教養型, 社交型, 奉仕型)が見い出される。本論は、コミュニティ活動の中でも、以上の四つの型に限定し、実利型と教養型を「趣味・学習活動」、社交型を「スポーツ活動」、奉仕型を「奉仕活動」として論を進めていく。

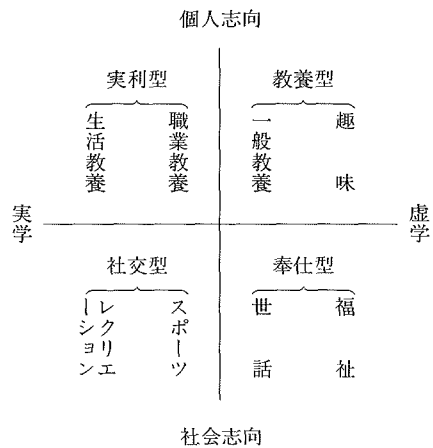


図1 学習内容の分類

(注2) ここで個人志向とは、学習者個人の利益や幸福を直接の目的とし、かつ個人が単独で行いいうような学習や活動をいう。これに対して社会志向とは、集団中心、他者中心の利他的な学習や活動であり、集団のなかで、他人とともにしか行いえないものである。

次に虚学とは、直接現実的な利益をもたらさないが、精神的な充実や満足をもたらすような学習や活動を指すのに対し、実学とは、実利、実益を目指した学習、現実的な目に見える利益をもたらすような活動を指す。(新堀通也「生涯教育と社会教育」新堀通也編「社会教育学」有信堂 1981 p.19)

(2) 趣味・学習活動

過去1年間に実施した趣味・学習活動についてまとめたものが表1であり、男性の48.5%、

女性の72.5%が何らかの趣味・学習活動を行っている。

表1 内 容

項 目	性 別		項 目	性 別	
	男	女		男	女
囲碁・将棋	18.6	0.6	謡曲・小唄	1.2	0.6
写真技術	2.4	0.6	民謡・ダンス	1.2	6.6
盆栽・園芸	7.8	1.8	音楽鑑賞	3.6	1.8
華 道	0.6	18.0	音楽(演奏・合唱)	0.6	5.4
茶 道	0.0	1.8	琴・三味線・尺八	1.2	4.2
料 理	1.2	21.6	演劇・観劇	5.4	3.0
手 芸	0.6	9.0	読書・文学	8.4	9.0
書 道	1.8	1.2	着付け教室	0.0	14.4
和裁・洋裁	0.0	1.8	子どものしつけと教育	16.2	28.7
民 謡	2.4	2.4	その他	6.0	2.4
詩 吟	7.8	5.4	行っていない	51.5	27.5

内容別にみると、男性は囲碁・将棋が18.5%と最も多く、子どものしつけと教育16.2%、読書・文学8.4%と続いている。一方、女性は子どものしつけと教育が28.7%と最も多く、次いで料理21.6%、華道18.0%、着付け教室14.4%の順である。

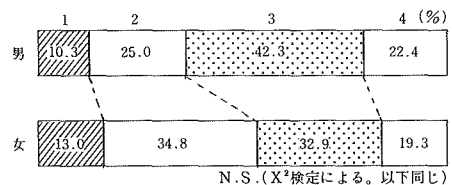
次に、趣味・学習活動の実施場所をたずねたものが表2である。趣味・学習活動を行っている者の中で、男性は公民館が63.0%と一番多く、個人宅が33.3%と続いている。女性は公民館が86.8%と非常に多く、次いで個人宅と学校の施設の18.2%である。都市^(注3)と比較して、なぜ公民館の占める割合が高いかについては、農村において、趣味・学習活動の拠点は公民館であり、住民の学習要求が多様化・高度化しても他の施設がないために最終的には公民館を利用し得る活動になってしまうものと推測される。

また、地域の人々と一緒に趣味・学習活動にどの程度取り組んでいるかについては、上の結果をうけて、「積極的に取り組んでいる」と「まあまあ取り組んでいる」ものを合計すると、男性は35.6%、女性は47.8%であり、比較的よく取り組んでいる。(図2) 今後の課題としては、男性の取り組みを増加させることが必要であると思われる。

(注3) 都市では趣味・学習活動を行っている者の中で、男性の19.2%、女性の39.4%が公民館を利用している。都市における公民館での趣味・学習活動が振わない理由として、趣味・学習活動には個人志向の

表2 実施場所

項目	性 別		M.A.(%)	
	男	女	男	女
個人宅	33.3	18.2		
職場の施設	17.3	5.8		
学校の施設	17.3	18.2		
公民館	63.0	86.8		
学校、公民館以外の公的施設	9.9	5.8		
その他	1.2	0.0		



1. 積極的に取り組んでいる
2. まあまあ取り組んでいる
3. あまり取り組んでいないほう
4. 全く取り組んでいない

図2 地域の人々との取り組み

傾向があり、住民の学習要求の多様化・高度化現象が起こると、公民館レベルでは満足しなくなり、市レベルへと発展し、文化センターや商業レベルの文化学院へ志向してしまう傾向があげられる。(堺賢治「コミュニティにおける文化活動とスポーツ活動との関連について」学校体育 1983.1 p.56)

(3) スポーツ活動

過去1年間に実施したスポーツ活動について示したのが表3であり、男性の91.0%、女性の65.3%が何らかのスポーツ活動を行っている。

スポーツ活動を実施している人のスポーツ種目をみると、男性はソフトボールが85.6%と最も多く、バレーボール22.8%、ジョギング16.2%と続いている。一方、女性もソフトボールが35.6%と最も多く、次いでバレーボール29.3%、体操・散歩21.6%の順である。

次に、スポーツ活動の実施場所をたずねたのが表4である。スポーツ活動を行っている者の中で、両者とも学校の体育施設（男性90.7%、女性67.9%）をよく利用している。

学校の体育施設の利用が多い理由として、両者とも1位のソフトボールは、学校の体育施設を除いてはほとんど行うことができないこと。また農村という地域特性の点から農閑期になっても他の仕事が多く、スポーツが行える時間は夜しかなく、夜間照明の完備した各地区の学校施設を利用しているといえる。

問題点は、施設によってスポーツ種目が限定されてくることである。これからは住民のスポーツ欲求が多様化してくると思われ、住民のニーズを組みとったエリアサービスも必要となってくるであろう。

図3はスポーツクラブへの加入率を示したものであり、男性の44.3%、女性の10.8%が何らかのクラブに加入している。

農村地域のスポーツは行事中心型であるといわれてきた⁽⁴⁾にもかかわらず、男性の加入率の高さは、城川町のスポーツ活動がいかに地域に密着しているかを示す数字である。一方、女性の加入率の低さは、女性がまだ農業労働や家事等に追われて忙しい点と、誰もが参加できるレクリエーション・スポーツ（例えばレクリエーション・バレーボールなど）の普及が遅れている点を表わしているものと推察される。

表3 種類

項目	性別		M.A.(%)	
	男	女	男	女
野 球	7.8	0.6		
ソフトボール	85.6	35.6		
テ ニ ス	3.6	0.6		
バレーボール	22.8	29.3		
卓球、バドミントン	6.6	10.2		
格技(柔道・剣道等)	1.8	0.0		
ジョギング(ランニング)	16.2	7.8		
体操、散歩	9.6	21.6		
ゴルフ、ボーリング	0.6	0.0		
野外活動	2.4	3.6		
その他	1.2	0.6		
行っていない	9.0	34.7		

表4 実施場所

項目	性別		M.A.(%)	
	男	女	男	女
公共施設(学校を除く)	24.5	14.7		
学校の体育施設	90.7	67.9		
職場の施設	4.0	11.0		
商業施設	0.7	0.0		
公園・空地	1.3	2.8		
道 路	13.9	16.5		
自 宅	7.9	29.4		
野外(海・山・川)	4.6	6.4		
そ の 他	0.0	1.8		

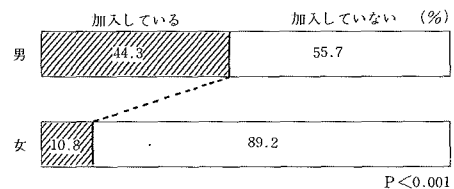


図3 クラブ加入の有無

(4) 奉仕活動

地域の役員経験の有無については、男性の88.0%、女性の82.0%が何らかの役員を経験している。

内容別にみると、男性は部落総会・各区常会（町内会・自治会にあたる）が63.5%と最も多く、消防団58.7%、P.T.A. 44.9%と続いている。女性では婦人会が68.3%と最も多く、次いでP.T.A. 46.7%、保育所の父母の会31.1%の順である。全般的に男性は部落の自治に関する役員、女性は子どもに関する役員についている傾向がある。都市⁽²⁾と異って男性の奉仕活動が盛んな理由として、職住が分離していないため、「居住地区コミュニティ」⁽⁵⁾の役員を多く兼ねているものと思われる。

次に、今後部落総会や各区常会の役員に選ばれるとすればどのようにするのかという質問に対しては、両者とも「進んで引き受けると答えたものは少なく、「しかたがないので引き受けると答えたものが6割近くもあり、農村地域における人間関係の上で引き受けている人が多いといえる。

表5 役員経験 M.A.(%)

項目	性別	
	男	女
部落総会・各区常会（町内会）	63.5	6.6
婦人会	1.2	68.3
P.T.A.	44.9	46.7
公民館	38.9	3.6
愛護班	40.1	18.0
青年団	40.1	7.8
消防団	58.7	1.8
保育所の父母の会	14.4	31.1
農協・森林組合	21.0	3.6
経験がない	12.0	18.0

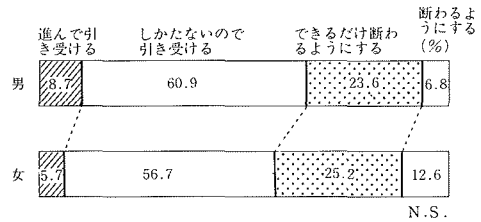


図4 役員への依頼

(5) 公民館活動

公民館は、近隣住区単位に置かれる、住民の日常生活に結びついた多目的で総合的な社会教育センターであり⁽⁶⁾、地域住民の趣味・学習、スポーツ、奉仕活動などのコミュニティ活動を援助する役割を担っている。

過去2年間に公民館を利用したものは、男性88.0%、女性83.1%であり、両者ともよく利用している。利用回数についても、男性は、「週1回以上」5.7%、「月1～2回程度」39.9%、「年に数回程度」42.4%であり、女性は、「週1回以上」6.8%、「月1～2回程度」31.1%、「年に数回程度」45.2%であり、両者とも4割程度が定期的に利用している。

利用している者の目的について、男性は「各種会合（部落総会・各区常会など）」が79.1%と最も多く、「スポーツ・レクリエーション活動」50.7%と続いている。女性も男性と同様に「各種会合」が59.9%と最も多く、「公民館主催の行事（文化祭など）」49.3%、「公民館主催の講座・学級」43.7%

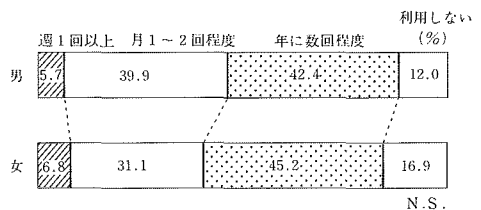


図5 利用回数

表6 利用目的 M.A.(%)

項目	性別	
	男	女
各種会合（部落総会・各区常会など）	79.1	59.9
各種団体（農協など）の活動	44.6	16.9
公民館主催の講座・学級	26.4	43.7
公民館主催の行事（文化祭など）	45.2	49.3
スポーツ・レクリエーション活動	50.7	33.8
グループ活動	29.7	36.6
その他	9.5	12.0

と続き、各種会合を除けば、男性のスポーツ型に比べ趣味・学習型といえる。(表6)

次に、公民館への要望についてたずねたのが表7である。男性は「スポーツ・レクリエーションができる施設・用具をそろえてほしい」が29.9%と最も多く、「設備・備品をもっと充実してほしい」24.0%、「健康・体力づくりの講座・学級を開いてほしい」19.8%と続いている。一方、女性では、「健康・体力づくりの講座・学級を開いてほしい」26.9%、「子どもの教育に関する講座・学級を開いてほしい」25.2%、「趣味の講座・学級を用いてほしい」24.6%が多い。全般的に男性がどちらかといえばスポーツ活動に志向するのに対し、女性は趣味・学習活動に志向するといえよう。

表7 公民館への要望

項目	性別	
	男	女
もっと簡単(容易)に利用できるようにしてほしい	18.0	16.8
広報活動をもっとしてほしい	13.2	9.0
健康・体力づくりの講座・学級を開いてほしい	19.8	26.9
子どもの教育に関する講座・学級を開いてほしい	9.6	25.2
趣味の講座・学級を開いてほしい	12.6	24.6
学習の講座・学級を開いてほしい	6.0	7.2
専門的な指導者をさがしてほしい	18.6	11.4
設備・備品をもっと充実してほしい	24.0	17.4
図書をもっとそろえてほしい	7.2	9.6
サークル活動に財政的援助をしてほしい	18.0	6.6
スポーツ、レクリエーションができる施設・用具をそろえてほしい	29.9	13.8
みんなが参加できる行事(文化祭など)を企画してほしい	15.0	15.0
三世代が交流できるような機会を多くつくってほしい	4.2	4.8
新年会・忘年会・親睦会などの飲み会で利用させてほしい	5.4	1.8
その他	2.4	1.8
無回答	13.2	14.4

また、これからは農村の高齢化社会に対応して、住民のニーズの高い「健康・体力づくりの講座・学級」を開き、それを日常生活へどのように定着させるのかも今後の課題となるであろう。

2. コミュニティ関与とコミュニティ形成

(1) コミュニティ関与

表8はコミュニティ活動へどのような順序で参加したのかを、趣味・学習、スポーツ、奉仕活動の三類型に分けて聞いた結果である。

男性の場合には、「スポーツ→奉仕→趣味・学習」が23.4%と最も多く、次いで「スポーツ→趣味・学習」16.2%、「スポーツ→趣味・学習→奉仕」と「奉仕→スポーツ→趣味・学習」が10.8%と続き、スポーツ活動を通してコミュニティ活動へ参加している人が多い。一方、女性の場合には、「スポーツ→奉仕→趣味・学習」12.6%、「趣味・学習→スポーツ→奉仕」11.4%、「奉仕→趣味・学習→スポーツ」10.2%のパターンが多く、特定のパターンはみられない。

また、趣味・学習、スポーツ、奉仕のどの活動にも参加している人は、男性54.0%、女性52

表8 コミュニティ活動への関与のパターン (%)

順序	性別		順序	性別	
	男	女		男	女
a→b→c	4.8	11.4	b→c	4.2	2.4
a→c→b	2.4	5.4	c→b	0.6	2.4
b→a→c	10.8	6.0	a→c	2.4	0.6
b→c→a	23.4	12.6	c→a	0.0	1.2
c→a→b	1.8	10.2	a	0.0	2.4
c→b→a	10.8	7.2	b	1.2	0.6
a→b	0.6	0.6	c	1.8	5.4
b→a	16.2	2.4	無回答	19.2	29.3

a：趣味・学習 b：スポーツ c：奉仕

.8%であり、コミュニティ活動への高い参加率を示している。中でも男性においてスポーツから趣味・学習や奉仕活動へ参加している人は34.2%を占め、城川町のスポーツ活動が、いかにコミュニティ関与に寄与しているかが理解できる。一方、女性の場合は、18.6%と少なく、女性のスポーツ活動を盛んにすることが、今後のコミュニティ政策として必要であろう。

(2) コミュニティ形成

コミュニティ活動の中で、どの活動がコミュニティ形成に重要であるのか、その順序を聞いたのが表8である。

男性は、「スポーツ→趣味・学習→奉仕」33.5%、「スポーツ→奉仕→趣味・学習」26.5%とスポーツ活動が大変重要なものであると答えている。一方、女性では「スポーツ→趣味・学習→奉仕」が27.1%と最も多く、次いで「奉仕→趣味・学習→スポーツ」20.5%、「趣味・学習→スポーツ→奉仕」17.9%と続き、特定のパターンはみられない。

このような結果がでた理由としては、コミュニティ活動への関与のパターンとして、スポーツ活動から参加するのは男性に多く、女性の場合にはどの活動からもコミュニティ活動へ参加するため、それがコミュニティ形成の意識に影響を及ぼしているものと推察される。

表9 コミュニティ形成への寄与 (%)

順序	性別	
	男	女
a→b→c	8.4	17.9
a→c→b	7.1	11.3
b→a→c	33.5	27.1
b→c→a	26.5	11.3
c→a→b	7.1	20.5
c→b→a	17.4	11.9

P<0.001

IV. 結 語

(1)農村の公民館レベルのコミュニティ活動（趣味・学習、スポーツ、奉仕活動）の中で、男性はスポーツ活動、女性は趣味・学習活動によく参加し、奉仕活動については両者とも差はみられなかった。

(2)公民館の利用目的として、各種会合の他に男性はスポーツ活動、女性は趣味・学習活動が

多い。また公民館への要望として、男性はスポーツ活動、女性は趣味・学習活動とスポーツ活動を望む傾向がある。

(3)コミュニティ活動への関与のパターンでは、男性は主にスポーツ活動から、女性はどのパターンの活動からも参加している。

本研究に御協力をいただいた城川町教育委員会の方々に深く感謝の意を表わします。また現地調査及び資料整理等に協力を惜しまなかった西岡克君（遊子川小学校教諭）に記して謝辞としたい。

参 考 文 献

- (1) 堺賢治「コミュニティスポーツとコミュニティ形成」 日本レクリエーション学会第11回大会号 1981 p. 18
- (2) 堺賢治, 藤原誠「コミュニティスポーツとコミュニティ活動に関する研究—公民館レベルを中心にして—」 愛媛大学教育学部紀要 第1部 第29巻 1983 pp. 143-150
- (3) 新堀通也「社会教育学」 有信堂 1981 p. 19
- (4) 団琢磨「農村における社会体育の現象と今後の課題」 島根大学教育学部論集 第16号 1966 p. 150
- (5) 松原治郎「コミュニティの社会学」 東京大学出版会 1978 p. 33
- (6) 中島俊教「これからの公民館」 ぎょうせい 1975 p. 16